棕櫚の主日礼拝説教 「神の子だからこそ…」

日本基督教団石神井教会　2017年4月9日

招詞（エルサレム入城の記念）【旧約聖書日課】ゼカリヤ書　9章9～10節

招詞（エルサレム入城の記念）【福音書日課】マタイによる福音書　21章1～9節

【旧約聖書日課】哀歌　5章15～22節

15 わたしたちの心は楽しむことを忘れ、踊りは喪の嘆きに変わった。
16 冠は頭から落ちた。いかに災いなことか。わたしたちは罪を犯したのだ。
17 それゆえ、心は病み、この有様に目はかすんでゆく。
18 シオンの山は荒れ果て、狐がそこを行く。
19 主よ、あなたはとこしえにいまし、代々に続く御座にいます方。
20 なぜ、いつまでもわたしたちを忘れ、果てしなく見捨てておかれるのですか。
21 主よ、御もとに立ち帰らせてください、わたしたちは立ち帰ります。
　わたしたちの日々を新しくして、昔のようにしてください。
22 あなたは激しく憤り、わたしたちをまったく見捨てられました。

【福音書日課】マタイによる福音書　27章32～56節

32兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字
架を無理に担がせた。33そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着
くと、34苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲も
うとされなかった。35彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、
36そこに座って見張りをしていた。37イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエス
である」と書いた罪状書きを掲げた。38折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右
にもう一人は左に、十字架につけられていた。39そこを通りかかった人々は、頭を振りな
がらイエスをののしって、40言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、
自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」41同じように、祭司長たちも律法学
者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。42「他人は救ったのに、自分は救
えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。
43神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言
っていたのだから。」44一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをのの
しった。
　45さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。46三時ごろ、イエス
は大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、な
ぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。47そこに居合わせた人々のう
ちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。48そのうちの
一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエス
に飲ませようとした。49ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見て
いよう」と言った。50しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。51そのとき、
神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、52墓が開いて、
眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。53そして、イエスの復活の後、
墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。54百人隊長や一緒にイエスの見
張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この
人は神の子だった」と言った。55またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。
この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。56その中
には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

受難週の歓迎と拒絶

受難節（レント）の祈りの四十日を過ごしてきたわたしたちは、今日、最終コーナーを回って、主のご復活を祝うイースターのときへと向かう最後の直線路、「受難週」に進み入ってきました。主イエスがエルサレムの町に入られて過ごされた最後の一週間の出来事。福音書が描くその出来事の一つひとつを、教会は、最初の時代から二千年間変わることなく、「受難週」を迎えるたびに繰り返し、語り直し、聞き直し、心に留めなおしてきました。

その最初の日である「棕櫚の主日」の今日、わたしたちは、礼拝の初めにまず、御言葉の物語るところに耳を傾けて、主イエスのエルサレム入城の記念をいたしました。そのとき、弟子たちの用意した子ロバに乗ってエルサレムの城門を進み入られた主イエスのことを、迎えた人々は、棕櫚の木の枝を敷いたり振りかざしたりして歓迎し、叫び声を上げたのです。「**ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ**」（マタイ 21:9）。この、詩編 118 編の中の言葉かと思われる歓迎の叫びの歌声に、わたしたちも、最初の讃美をもって声を合わせました。讃美の歌を歌うことを通して、わたしたちもまた、あの二千年前にエルサレムの城門に進み入られた主イエスを歓迎し、お迎えしているのです。

もちろん、わたしたちは、わたしたちのもとにおいでくださる主イエスを歓迎し、お迎えすることを知っています。日曜日の教会に、わざわざ主イエスを拒絶するためにおいでになる方は、ほとんどいらっしゃらないでしょう。わたしたちは、教会の営みを通して、ことに礼拝の営みを通して、わたしたちの中に、わたしたちの間に、主イエスを歓迎し、お迎えするのです。ここで、わたしたちは、主イエスを、わたしたち一人ひとりの心の内にお迎えするだけでなく、わたしたちの交わりの間にお迎えします。主イエスご自身が、「**二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる**」（マタイ 18:20）とおっしゃられていたことを信じて、わたしたちは、わたしたちの間においでくださる主イエスを歓迎し、お迎えするということに取り組んできました。わたしたちの取り組みということだけでなく、わたしたちは、自分の家族や子どもたち、親しい周囲の人たちにも、そうなってほしいと願ってきたのです。愛する者のために、そう願わずにいられないのです。「主イエスを、あなたのもとにもおいでくださる方として、歓迎してほしい。迎え入れてほしい」。

けれども、そうであればこそ、わたしたちは、今日、讃美の叫び声をもって主イエスを歓迎する「棕櫚の主日」に、わたしたちのうちにお迎えした主イエスがこの先、どこに向かわれるのか。どの道を進まれるのかを、はっきりと見ないわけにはいきません。いいえ、むしろ、主イエスを祝福のうちにお迎えするわたしたち人間が、どのような道に主イエスを追いやろうとする者であるのか。歓迎の叫び声を上げた舌の根も乾かぬうちに、手のひらを返したように、否み、拒み、拒絶する者。そのような人間の姿を、わたしたちは、エルサレムへと進み入られた主イエスの出来事の中に、この週、見ないわけにはいかないのでしょう。

神の子なのだから！

わたしたちが今日、福音書によって心に留めるように促されているのは、人々から拒絶され、その手に渡され、十字架につけられた主イエスです。

主イエスが日曜日にエルサレムに入られたその週の金曜日の朝です。十字架につけられるために、主イエスは、エルサレムの町の外に位置する刑場、ゴルゴタの丘までの道を、引かれて行かれました。そこに、エルサレムの町に入られたときに伴われていた弟子たちの姿はありません。代わりに伴っているのは、ローマの兵士たち。そして、無理やり主イエスの十字架を担がせられたキレネ人シモン。

しかし、その道行きを見守っている多くの人々がいました。刑場まで押しかけ、犯罪人が十字架刑に処せられるのを間近で見物する人々。その中には、つい数日前、子ロバに乗ってエルサレムの城門を入ってきた主イエスを歓迎の叫び声を上げて迎えた人たちもいたことでしょう。もちろん、今は、歓迎の声を上げたりはしません。そこに響き渡っているのは、歓迎の声ではなく、主イエスを侮辱する人たちの声です。大きな声で侮辱する人たちがいました。「**神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りてこい**」。「**他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから**」。それだけではありません。この大きな声でののしり侮辱する人たちの陰には、もっとたくさんの、ひそひそと噂し合う人々が、数知れずいたのに違いありません。その人たちもまた、こう言い合ったのでしょうか、「あの人は、神の子だと言っていたけれども、何の意味があったのか…」、「本当に神の子だったら、こんなひどい結末にはならなかったのでは…」、「いいや、むしろ、あの人も自分は神の子だなどと言わなければ、十字架で殺されるようなことにまではならなかったのでは…」。

皆さんのほとんどは、洗礼を受けたキリスト者です。洗礼を受けたときから、「あなたは神の子」と呼ばれてきた一人ひとりです。わたしたちが「神の子」と呼ばれる一人ひとりであるならば、わたしたちは、十字架につけられた神の御子・主イエスのお姿を見て、何と言うべきでしょうか。神の子ならば、自分を救って見せるべきだ。神の子ならば、他人ばかりでなく、自分のことをこそ救ってみせるべきだ。神の子ならば、神に頼ればすぐに救われることを、身をもって示してみせるべきだ。そのように、わたしたちは言うべきでしょうか。

ゴルゴタの丘で十字架につけられた主イエスは、そうはなさいませんでした。神の子として救われた姿をお示しにはなられなかった。あるいは、神の子として平安な心を得た悟りの姿をお示しになられたのでもなかった。主イエスは、十字架の上で、神に向かって叫ばれたのです。「**エリ、エリ、レマ、サバクタニ**」、「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」。そう嘆きの言葉を叫ばれて、まもなく、息を引き取られたのです。

神の子は、ご自分を救いませんでした。他人を救っても、ご自分を救いませんでした。ご自分の心の平安を得ることさえなさらなかった。自分を捨て置かれた。

主がお招きくださるところへ

なぜ、主イエスは、そうなされたのでしょうか。

主イエスが神の子としてそうなされたのは、まだ、ご自分を侮辱する者たちが大勢いたからなのではないでしょうか。ご自分をののしる者たち、ご自分を拒絶する者たちが、まだ大勢残っているのです。神の子を侮辱する人たちです。神の子を否む人たちです。神の子を、ときに歓迎し、ときに拒む人たちです。そのような者たちが、まだ大勢いるのです。けれども、主イエスは、その者たちのことも救おうとなさっていらっしゃる。その人たちのことも、神の子と呼ばれ、神の子の命を生きるようになるべき一人ひとりとして、ご自分のもとに迎えられようとしていらっしゃる。

主イエスは、ご自分を拒む者たちが、まだこの世の暗闇にとらわれたままになっていることを、ご存じなのです。神の子として讃美を共に歌うことができなくなっていることを、ご存じなのです。暗闇の中で、神の子として讃美を共に歌うこともできずにいる人々。その暗闇の中に、主イエスは、神の子としてなお留まらなければいけない。暗闇の子らを一人残らず、神の子の光のもとへと引き上げなければいけない。神の子だからこそ、そうなさらずにはいられなかった。

主イエスが、神の子としてご自分の救いを願われなかったのは、そのためなのではないでしょうか。神の子として一人穏やかに平安に心保つことへと向かわれなかったのは、そのためなのではないでしょうか。

十字架は、感傷的で麗しいものではありません。慕わしい十字架など無い。十字架の上の主イエスは、無残なお姿で、力なく死を迎えられたからです。主イエスの十字架は、決して美しいものではないのです。輝かしい殉教物語でもありません。無残にも、嘆きと絶望を口にして死を迎えた人の出来事なのです。けれども、そこにこそ、主イエスがお示しくださった「本当の神の子」の姿があるのです。百人隊長の証言は、そのことを指し示している。十字架の上で、無力に、嘆きと絶望のうちに死を迎えられた主イエスこそ、「**本当に…神の子だった**」と。

この、神の子の十字架へと、わたしたちは招かれてきたのです。この十字架を自分のものとして背負って、従ってくるようにと、主イエスは、弟子たちを、わたしたちを、お招きくださっていたのです。この十字架の上の神の子を、今日、わたしたちは歓迎し迎え入れました。この週の出来事へと招かれ、わたしたちは、十字架を背負うことの意味を、キレネ人シモンと共に学ばせていただくのです。

十字架の上で、神の子は、叫び声を上げるのです、「**わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか**」。その嘆き絶望の叫びを、神の子は避けてはいけない。世のすべての者を救われるという御心を実現されるために、神は、自分を救わない神の子を用いられるのです。見捨てられたとしか思えない暗闇の現実の中から、神はすべての者を必ず引き上げてくださるおつもりなのです。自分を救わない神の子と共に、引き上げてくださるおつもりなのです。

主イエスが神の子だからこそ進み行かれた道。十字架の神の子の道、自分を救わない神の子の道。その道に、わたしたちも従うようにと招かれているのです。